

高温・少雨に対する農作物等管理技術対策について

令和 7 年 8 月 8 日
埼玉県農林部

関東甲信地方では 7 月 18 日頃に梅雨明けしたとみられ、埼玉県では梅雨明け以降、気温は高く、降水量は少ない状況となっています。

今後も平年値を上回る高温がしばらく継続すると予想されており、農作物への影響が懸念されます。

そこで、高温少雨に対する農作物等管理技術対策資料を作成しましたので、参考としてください。

また、高温、高湿下での農作業は、熱中症を引き起こしやすいので注意してください。

水 稲

- 1 早期栽培の極早生品種は 7 月末から収穫が始まっている。高温のため出穂から成熟期までの期間が短く、刈取適期期間が短いので刈遅れに注意する。
- 2 早期栽培のコシヒカリ等の中早生品種は 8 月中旬から収穫期を迎えるが、登熟期間が高温に推移すると収穫適期が早まることが予想されるので、刈遅れに注意する。また、早期落水は品質低下を招くので、出穂後 30 日程度まで間断かん水を心掛ける。
- 3 早植栽培は 7 月下旬から出穂期を迎えている。出穂期前後各 1 週間は深水管理、その後は間断かん水を実施し根を健全に保つように心掛ける。
「彩のかがやき」では、穂肥施用後も高温が予想される場合には、緊急的な対策として、出穂前 5 日～穂ぞろい期頃の葉色が 3.5 以下の場合には窒素成分で 1～2 kg/10a 程度の追肥を行う。
- 4 普通期栽培の「彩のかがやき」では出穂前 25 日頃（幼穂長 0.5～1 mm）に葉色を確認し、4 以下の場合には窒素成分で 3 kg/10a を限度に追肥を行う。4 以上の場合には低下するまで施用時期を遅らせ、施用量を 2 kg/10a 程度に減ずる。もし出穂前 10 日になっても 4 以上の場合には追肥を行わない。
また、上記の追肥後出穂前 10 日頃にも葉色を確認し、4 以下の場合には 2 kg/10a 程度を追加施用する。
その後も高温が予想される条件となった場合には、緊急的な対策として、出穂前 5 日～穂ぞろい期頃の葉色が 3.5 以下の場合には窒素成分で 1～2 kg/10a 程度の追肥を行う。
- 5 用水不足により取水制限などが行われる場合には、水利組合等地域の話し合いで節水栽培を行う。
(1) 用水を有効活用するため、畦畔や水尻を点検しネズミ穴や畦畔の崩れ等

- を補修して漏水を防ぐ。また、止水時に用水路の水漏れ等の補修をしておく。
- (2) 幼穂形成期から開花期（出穂期 1 週間後頃）までは、水稻栽培で最も水を必要とする時期にあたる。水不足になると花粉が不稔となり減収するリスクが高まる。取水可能な水量に応じて供給量を検討し、日中は田面が露出しない程度の浅水を確保する。さらに用水が不足する場合は、数日に 1 回かん水し、土壌が濡れた状態を維持するよう心掛ける。
 - (3) かけ流しは用水を大量に使用することから水不足を招き、かえって高温障害を助長する恐れがあるので行わない。
 - (4) 番水制などにより通水時の水量を確保し、効率的な給水に努める。

大 豆

- 1 まき直しを行う場合は、8 月上旬までの播種を目安とし、狭畦栽培で播種量を増やして早期に生育量を確保する。また、播種時に種子水分を 14～15 %程度に調整すると播種後の降雨による障害を軽減し発芽率が高まる。
- 2 土壌の乾燥により出芽が遅れる場合は、夕方以降にかん水し、速やかに排水する。
- 3 開花期から莢伸長・子実肥大期には大量の水を必要とし、干ばつになると落花・落莢が増え減収となる。かん水が可能な地域では、最長葉が直立し、ほ場全体が白っぽく見えるようになる前に畦間かん水を実施し、かん水後は滞水しないよう早めに排水する。その後も降雨が見込めない場合は、莢肥大伸長初期まで定期的にかん水を実施する。
- 4 開花期以降は中耕・培土を行わない。
- 5 ハスモンヨトウ、カメムシ類の早期発見に努め、的確な薬剤散布を行う。

野 菜

◎共通事項

- 1 露地野菜では、敷わら、マルチフィルム、べたがけ資材等を使用して、地表面からの水分の蒸発を抑制する。
また、施設野菜では、遮光（熱）資材や遮光（熱）塗料等を利用し遮光（熱）を行うとともに、開口部をできるだけ大きく取り、換気扇や循環扇等により通風を図る。
- 2 かん水を行う場合は、地温が低下している早朝か夕方に行う。
- 3 高温乾燥条件で発生しやすいハダニ類、アブラムシ類、アザミウマ類、カメムシ類等の早期発見に努め、的確な防除を行う。

◎育苗期の管理

- 1 気温の高い日中は遮光資材等で日よけを行い、強光によるダメージを最小限にする。遮光資材は天気に応じて開閉できることが望ましい。

育苗ハウスの開口部をしっかりと確保することで通風を良くする。

また、外部遮光の場合は遮熱資材の活用も有効のため導入を検討する。

- 2 灌水は適量を随時行い、過乾燥及び過湿にならないように注意する。

夕方の灌水は夜間の空中湿度を上昇させ、徒長及び病害発生を助長するため、やむを得ない場合を除き、なるべく控える。

- 3 アブラナ科の秋冬野菜を育苗している場合、定植に適した土壌水分や気温にならない場合は、無理に植えようとせず育苗期間の延長も検討する。

◎露地なす

- 1 高温と乾燥が続くと「つやなし果」や「短形果」等の不良果が増加するので、敷わら等により乾燥を防止するとともに、適宜かん水を行って草勢維持に努める。
- 2 適切な整枝・誘引と摘葉を行い、古い葉からの蒸散を抑制するとともに、高温乾燥で発生が多くなるハダニ類、チャノホコリダニ等の防除薬剤の付着効果を高める。
- 3 草勢の回復が見込まれない場合は、更新剪定も検討する。

◎ねぎ

- 1 定植が遅れた苗については早朝か夕方にかん水を行い、生育促進を図る。
- 2 断根は生育低下や軟腐病等の発生を助長するため、高温時の土寄せや除草作業はできるだけ避ける。
- 3 追肥・土寄せを行う場合は、朝夕の気温低下により草勢の回復が見られたタイミングで、通常よりも追肥量を少なくする。
- 4 アザミウマ類、ハスモンヨトウ、シロイチモジヨトウ、ネギハモグリバエ等の発生に注意し、発生初期から薬剤防除を行う。
- 5 ゲリラ豪雨や台風に備えて明きょを設置し、ほ場の停滞水を速やかに排水できるよう準備をしておく。

◎さといも、やまのいも

- 1 かん水施設があるほ場では、1回当たり 20～30 ℓ/㎡程度のかん水を行う。かん水施設が無いほ場では、タンク等を利用し可能な限りかん水を行う。かん水は気温の低い夕方から夜間に行う。
- 2 土壌が極度に乾燥している場合は、追肥や土寄せ作業を行わない。
- 3 高温乾燥によりアブラムシ類やハダニ類の発生に注意し、発生初期から薬剤防除を行う。

◎ブロッコリー、キャベツ

- 1 定植は日中の暑い時間を避け涼しい夕方か早朝に行う。定植時に土壌が乾燥している場合は、植え穴に十分なかん水を行い活着を促す。

- 2 定植後、かん水チューブ等を活用し、こまめなかん水により活着を促す。
- 3 活着後も、長期の高温と乾燥が予想される場合は、早期出荷を目指すほ場を中心に、かん水を行い生育を促進させる。
- 4 ハイマダラノメイガ、ハスモンヨトウ等の発生に注意し、発生初期から薬剤防除を行う。
- 5 定植に適した土壌水分や気温にならない場合は、無理に植えようとせず育苗期間の延長も検討する。

◎秋冬にんじん（夏まき）

- 1 高温による土壌の乾燥や水不足によって、は種遅延に伴う収量低下や尻細、短根、発芽不良が発生しやすくなるので、かん水施設があるほ場では、は種前に十分にかん水をして土壌水分を確保する。適期は種後に発芽まで土壌を乾かさないう管理とし、土壌表面を固めないように注意しながら、かん水を行う。
- 2 かんがい施設のないほ場では、は種作業は降雨を待って行い、は種深度を2 cm と深くし、覆土を厚くして十分鎮圧する。
- 3 適正な土壌水分が確保できない場合は、晩限ギリギリまでは種を遅らせることも検討する。
- 4 除草剤は乳剤または水和剤を用い、水量を多目にして散布する。

◎抑制きゅうり

- 1 活着不良、生育不良などの対策として、定植前に本ほにたっぷりかん水して、下層土壌の含水率を高め、下層の毛管水を利用できるようにする。
- 2 購入苗を利用する場合は、可能であれば順化してから定植する。
- 3 定植後に株元かん水を行い、活着を促進させる。
- 4 アブラムシ類、アザミウマ類、コナジラミ類（ウイルス病対策を含む）の防除を行う。

◎いちご苗

- 1 ポット育苗では、かん水量の増加等により、育苗後半の急激な窒素不足が見込まれるので、肥培管理に注意する。徒長や根傷み防止のため、夕方以降のかん水は避け、また過かん水に注意する。
- 2 急激な水分蒸散による葉焼けが懸念されるため、遮光資材等による遮光を実施する。
- 3 高温乾燥によりアブラムシ類やハダニ類の発生に注意し、薬剤防除は薬害発生に留意し、高温時を避ける。

果 樹

◎共通事項

- 1 スプリンクラー等のかん水施設がある場合は、1回概ね20mm程度で3～5日間隔でかん水を行う。土壌水分の急激な変化を避けるため、土壌にひび割れができる前から始める。また、日中の高温時を避けて、夕方の時間帯に行うのがよい。
- 2 収穫を行う場合は、早朝の涼しい時間帯に行う。収穫した果実は、直射日光を避け、果実の温度が上がらないよう注意する。
- 3 草生栽培園では、定期的な刈取りを実施するが、刈りすぎないように注意する。
- 4 清耕栽培園では樹冠下にわら等を敷き、地温上昇と地表面からの蒸散を防ぐ。
- 5 ハダニ類やナシヒメシンクイ等の発生に注意し、発生初期の薬剤防除を徹底する。

◎なし

- 1 常に果実を試食し、果実の品質を確認するよう心がけ、収穫遅れにならないように注意する。

◎ぶどう

- 1 一般的に気温が高いと果実の酸味は早く抜け、着色が遅れる傾向にある。試食し果実の品質を確認し、適期収穫を行う。

花植木

- 1 露地切花や浅根性の植木類は、可能な限りかん水に努める。かん水は日中の高温時を避け、地温が低下した夕方以降又は早朝に畝間が湿る程度にかん水する。
- 2 敷わら等により地表面からの蒸散を抑制する。
- 3 遮光（熱）資材等を活用し、植物体温度の上昇を抑制する。
- 4 施設栽培では内外部に遮光（熱）資材を張り、施設内気温の上昇を抑制するとともに開口部をできるだけ大きく取り、換気扇や循環扇等により通風を図る。
- 5 高温、乾燥条件で発生しやすい、ハダニ類、アブラムシ類、アザミウマ類、カメムシ類等の早期発見に努め、発生初期の防除を徹底する。

茶

- 1 マルチ、敷きわら等により土壌水分の保持に努める。除草を行う場合は、表面を軽く耕うんする程度に行う。
- 2 高温時の農薬散布は葉焼けや薬害を起こしやすいため、朝夕の比較的気温が低く、日射の弱い時間帯に実施する。また、整せん枝はこの時期は見合わせるか、実施する場合は、夕方、気温が下がり始める時間帯に徒長枝を刈り落とす程度にとどめる。
- 3 棚施設等が設置された茶園では被覆遮光する。
- 4 定植当年の幼木では干ばつ害が懸念されるため、かん水、マルチ・敷きわらなどの対策を実施する。枯死株が発生した場合は、翌春補植する。
- 5 チャノミドリヒメヨコバイ、チャノキイロアザミウマ、ハマキムシ類が多発することがあるので、適切に防除する。本年、アオバハゴロモによる枯死がみられるので注意する。

畜産

- 1 密飼いを避け、畜舎の屋根や壁面への石灰乳または断熱塗料の塗布、畜舎周囲への遮光ネットやよしずの設置、換気扇・送風機利用による畜舎内の通気促進などにより、飼育環境を改善する。
- 2 次のような、高温に対応した飼養管理を行う。
 - ・冷たい水が十分に飲めるようにする。
 - ・涼しい時間帯に飼料給与するとともに、給与回数を増やす。
 - ・良質で消化率の高い飼料を与える。
 - ・必要に応じ、ビタミンやミネラルを給与し、栄養不足を補う。
 - ・畜体への散水・散霧を行い、体感温度を下げる。

◎農薬はラベルに記載されている適用作物、使用時期、使用方法等を十分確認の上、最終有効年月までに使用してください。

◎農薬の使用に際しては、以下のホームページで御確認ください。

農林水産省 農薬登録情報提供システム

<https://pesticide.maff.go.jp/>